〔研究論文〕

学級担任の学級会の指導に関する指導上の課題

―教職員の意識調査から―

後　藤　和　歌　子　　脇　田　哲　郎

Wakako GOTO　　Tetsuro WAKITA

福岡教育大学大学院教育学研究科
教職実践専攻生徒指導・教育相談
リーダーコース／久留米市立東国分小学校

福岡教育大学
教職実践講座

(2016 年 1 月 29 日受理)

特別活動には，人間関係を形成する力や社会に参画する力，自己を生かす力などを育成するという，子供達の成長に果たす大きな意義があることはこれまでも述べられてきている。しかしながら，全ての学級において特別活動への積極的な取り組みが見られるわけではない。そこで，特に自発的・自治的活動であるという特別活動の特質を有する学級活動(1)における話合い活動，いわゆる「学級会」について県内の１小学校の教職員の意識調査を行った。調査の結果，当該校の教職員は，特別活動の教育的な意義は理解しながらも、どのように指導すればいいのかがわからないという理由で学級会への取り組みが消極的になっていることが分かった。そこで，特別活動の指導計画や授業研修などを充実させて当該校の課題を解決するものである。

キーワード：学級会，特別活動の意義，特別活動の全体計画，学級活動の年間指導計画

１　問題と目的

文部科学省が示す「２１世紀をよりよく生きる資質・能力について」では，「自立した人格をもつ人間として，他者と協働しながら，新しい価値観を創造する力の育成」が明言されている。これは，まさに，「主体性」や「対人関係能力」（人と関わる力），「課題解決力」，「社会づくりに関わる力」など，特別活動でめざす子どもの姿と重なるものである。

また，中央教育審議会答申においては，「生きる力」は，「これからの変化の激しい社会において，いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていくために必要となる，人間としての実践的な力である。」と示されている。それは，紙の上だけの知識でなく，生きていくための「知恵」とも言うべきものであり，我々の文化や社会についての知識を基礎にしつつ，社会生活において実際に生かされるものでなければならない。単に過去の知識を記憶しているということではなく，自分で課題を見つけ，自ら考え，自ら問題を解決していく資質や能力であると言える。

そして，国立教育政策研究所が示す「２１世紀型能力」では，基礎力・思考力・実践力の３つが挙げてられている。そこでは，問題解決・発見力・想像力・論理的・批判的思考力・メタ認知・適応的学習力等の思考力の部分が学校で育てる力とされている。また，自律的活動力・人間関係形成力・社会参画力・持続可能な未来への責任といった実践力や意識・資質が外へ出

てくることが期待される力であるとされている。さらに，第２期教育振興基本計画は，４つのビジョンとして，「生きる力の確実な育成」，「未来への飛躍を実現する人材の育成」，「学びのセーフティネットの構築」，「絆づくりと活力あふれるコミュニティの形成」という基本的方向性を示している。その１つ目に示された「生きる力の確実な育成」として，生涯にわたる学習の基礎となる「自ら学び，考え，行動する力」などを確実に育てるということや，豊かな情操や，他者，社会，自然・環境と関わり，自らを律しつつ共に生きる力,主体的に判断し，適切に行動する力などを持つ子どもを育てるという点が挙げられている。

これらの考え方は,特別活動が目標とする「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度を育てるとともに，自己の生き方についての考えを深め，自己を生かす能力を養う。」という点や，学級活動が目標とする「学級活動を通して，望ましい人間関係を形成し，集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し，諸問題を解決しようとする自主的，実践的な態度や健全な生活態度を育てる」という点とも一致する。

このように，特別活動の教育的な意義は大きい。しかしながら，「特別活動の改善に関する調査報告書」（日本特別活動学会 2014）には，「小学校の特別活動は十分行われている」で，〔かなり賛成＋やや賛成〕の数値が 34.7％であり，やく 65％の小学校関係者が＜十分に行われていない＞としている。このことを裏付けるように，「最近，特別活動についての教師の指導力が低下している」とする回答が 74.1％であることもそれを象徴する数値であるといえよう。と，し示されている。また，小学校関係者が認識する特別活動の具体的な課題として，①特別活動の意義の再認識（創造的な取り組み），②教員養成の在り方，③内容相互の関連，④児童生徒の自治的な力量（特別活動の特性・目標），⑤校内組織の在り方と環境づくり，⑥教科等との関連,⑦評価の在り方などが挙げられている。

以上のことから，特別活動の意義は理解しているものの，積極的に特別活動が実施されていない現状が見えてくる。

そこで，特別活動の生命線とも言える，自発的・自治的な要素が最も顕著に現れる小学校特別活動の学級活動(1)の活動形態である話合い活動の別称「学級会」における，小学校教員の『学級会における意識調査』を行い，学級会に対する指導上の課題を明らかにするとともに，そこから見えてきた課題を克服する具体的な方策を探索するものである。

２　調査実施の概要

(1)調査方法と内容

①目的：本調査は，学級担任の，学級会の指導に関する意識を調査することによって，学級会の指導上の課題を明らかにし，今後の学級会の指導の充実のために調査結果を生かしていくことを目的とする。

②調査期間:平成 27 年 12 月 10 日～12 月 28 日

③調査対象：福岡県内の公立小学校 1 校の教職員 28 名

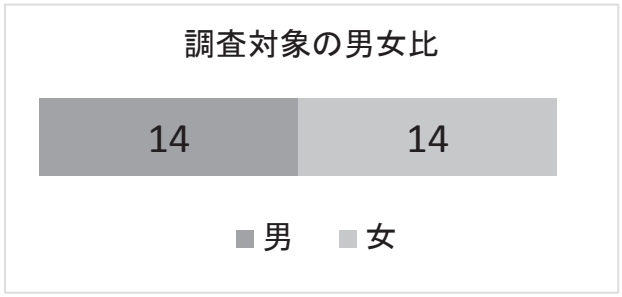
④方法：質問紙と記述式によるアンケート調査

⑤意識調査の内容

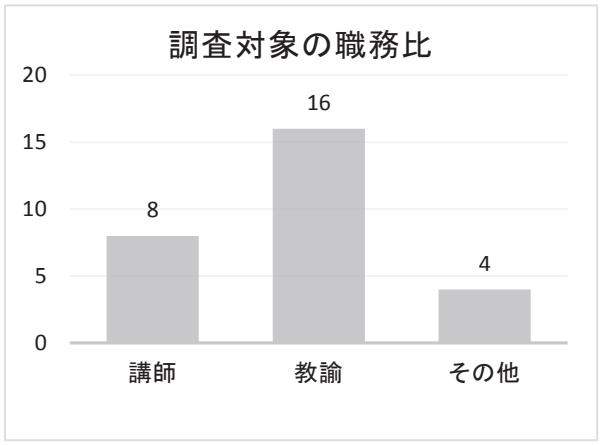
1　特別活動の充実は学校の安定に効果があると思うか
2　特別活動の充実は、学級の安定に効果があると思うか
3　２学期、学級において学級活動(1)をしていたか
4　２学期、学級において学級活動(2)をしていたか
5　学級活動に関する考えについて
6　担任している学級の子どもたちは、学級活動の時間は好きか
7　学級活動をする際に、学年の先生達で話し合うことはあるか
8　学級活動のカリキュラムを、どの程度参考にしているか
9　担任している学級では教室の中に、学級活動の掲示はあるか
10　担任している学級では学級目標は、どうやって決めているか
11　学級経営案をつくる際に、学級目標を意識しているか
12　担任している学級では、学級会コーナーが設けられているか
13　担任している学級では、議題箱が設置されているか
14　学級活動はどれくらいの頻度で行っているか
15　特別活動は、どんなことに役立つと思うか
16　学級活動をする際に、どんなことが難しかったり負担だと感じるか
17　学級活動をする際どんなことを考えたり感じたりしているか
18　子どもたちに身に付けたい力や態度はどういうものか
19　学級担任をする際、どんなクラスにしたいと思っているか
20　設問 19 のようなクラスにするために、具体的にどんなことをしているか

(2)回答者の基本的属性

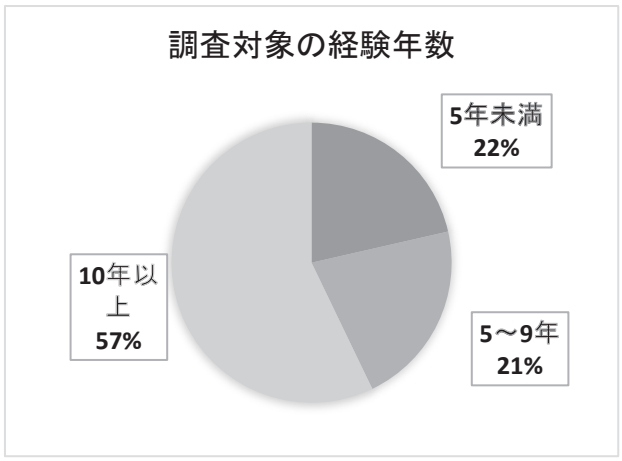
①性別



②職務



③経験年数



3　調査結果

(1) 学級活動に対する考え方に表記された語句

「学級活動に対する考え方」に表記された語句を拾い出してみると,「学級活動の教え方がよくわからない」「学級活動をどうしていいかわからない」と，学級活動をどのように指導すればいいのかわからないという表記が 13 個あった。また,「学級活動は教科書がないから実際に行うことができない（1 個）」という表記を「教科書がないからどのように指導したらいいかわからない」とすると,「学級活動の指導方法がよくわからない（14 個）」という表記にまとめることができる。その他,「学級活動をする時間がない（7 個）」「学級活動は面倒（7 個）」「学級活動をしなくても評価に差し障りがない（1 個）」という語句で学級活動に対する考えを表記している。このことから，本校の教員の多くが「学級活動の指導方法がよくわからない」と考えていることが推察できる。（図１）

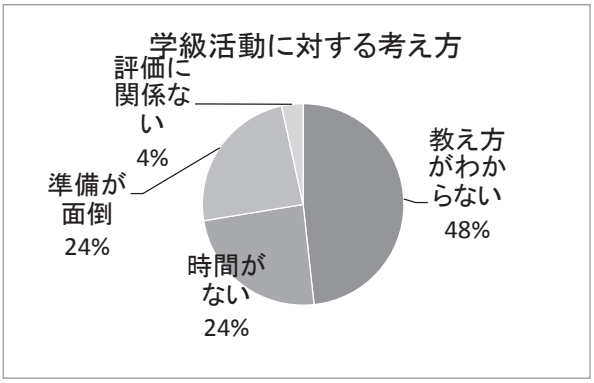


図1　学級活動に関する考え方

(2) 指導方法がわからないことからくる課題

「学級会コーナーの設置」や「議題箱の設置」は，学級活動(1)「学級会」を児童が自主的・実践的に取り組むために必要な手立てであり，特別活動の研究会や実践者には学級会を実践する上で必要な基礎的・基本的な事項とされている内容である。

本校においては,「学級活動コーナー」が設置されている学級は 6 学級であり, 17 学級において設置されていない。また，議題箱は 5 学級に設置してあり, 18 学級に設置されていない。(図２）

このことから，本校には「学級活動の指導方法がわからない」ということからくる指導上の課題が見えてくる。

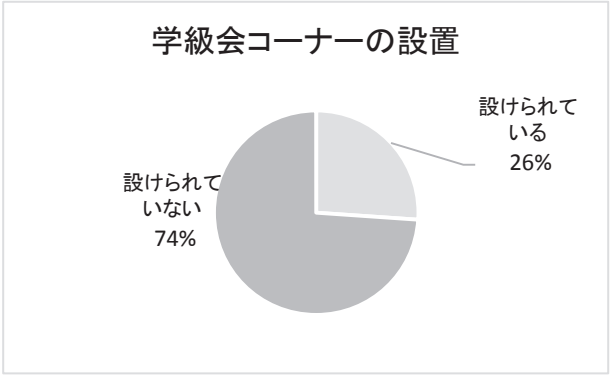


図2　学級会コーナーの設置

また，教室に学級活動の掲示を設けているかどうかについては，「いつもある」と答えた教

員は 27%，「ときどきある」27%，「あまりない」14%，「ない」と答えた教員は 32%にのぼる。

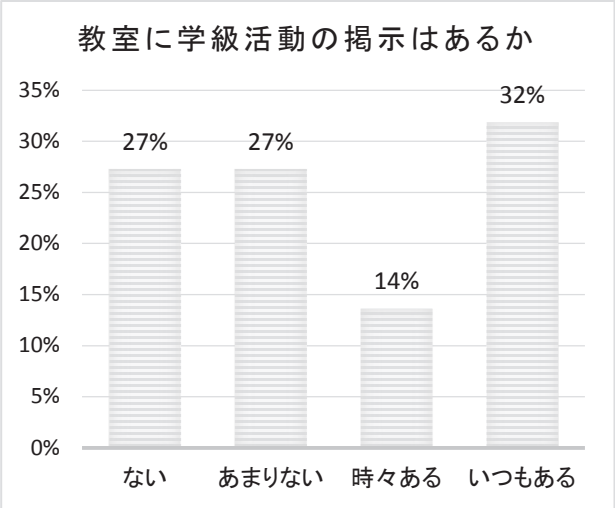


図3　学級会コーナーの設置

(3)学級活動のカリキュラムの活用

学級活動でどの時期にどのような内容を実施するか，校内に学年年間カリキュラムは存在する。しかし，それを参考にしている教員は，在籍校においては１割以下であり，「あまり参考にしていない」「全く参考にしていない」教員を合わせると，34%にのぼる（図４）。

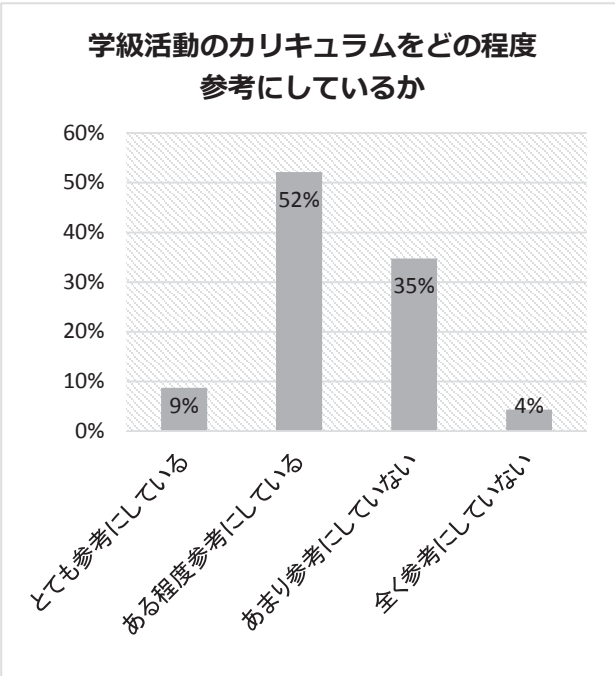


図4　学級活動のカリキュラムの活用

(4)学級活動に対する学年部での協議

また，（図５）からも明らかなように，学級活動の指導をどうしてよいか分からないと感じている教員が 48%いるにも関わらず，各学年部で相談したり話し合ったりしている教員は半数以上にのぼる。このことから，学級活動の指導に関して不安を抱きつつも，それを共有する場や助言を受けたり支援を与えたりする場がないという状況にあることが，学級活動の実践の充実に結びつかない課題の一つだと捉えることができる。

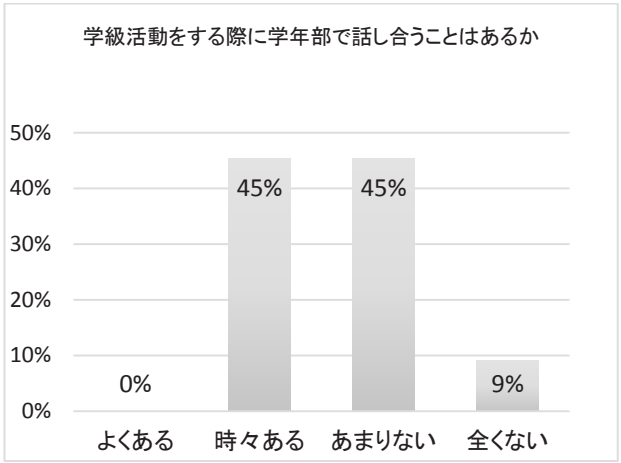


図5　学級活動に関する学年部での協議

(5)学級活動に対する若手教員の不安

これまで教職経験の少ない若年教員は，特別活動の教育的意義を，日々の実践の中で感じながらも，今，自分が行っていることが正しいのか不安を感じていたり，具体的にどのように学級会を進めたらいいのか自信がなかったりという不安が見られる（図６）。

教師 D・１年目
　意見の対立で、ゆずり合えない時の結論の出し方が難しい。
教師 B・４年目
　進め方、やり方を分かっていないため、内容以前の問題で、これでいいのだろうか・・・と思う。
教師 C・８年目
　諸々の意見を取捨選択させたり、まとめさせたりするためには、どんな風に進めたらいいかやどう声かけしたらいいかわからないままやっている。
教師 D・９年目
　学年でどの程度まで子どもに任せていいのか、学年・年令が違うところでの指導の入れ方に迷う。

図6　教員の自由記述

4　調査結果から見えてきた課題

以上のことを踏まえると，在籍校には生徒指導上の課題をはじめ，様々な課題があるにも関わらず，その解決に向けて，生徒指導的機能をもつ特別活動を活用しきれていないという点が明らかになった。また，特別活動の充実が教育活動において大きな役割を果たすことがわかっているにも関わらず（図７），特別活動を十分に活用しきれていないこれらの原因として，教員が具体的にどうしてよいかわからないという点が明らかになった。そして，学校教育目標の実現のため，なぜ，特別活動が有効であるのかという点において，今までの経験から一人ひとりの教員が「何となく」その効果を感じているといった現状がある。

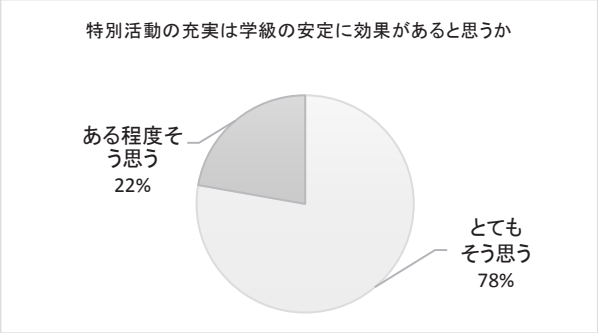


図7　特別活動の充実と学級の安定

特別活動や学級活動は，一人や数人の教員が実践していくのではなく，学校全体で取り組んでこそ大きな成果を上げると考える。個人のパフォーマンスで行われるのではなく，そこに所属する教員全体で行っていくことで，特別活動がめざす子どもの主体的な姿につながる。

しかし，特別活動の全体計画や年間指導計画の作成がなされているにも関わらず，低学年，中学年，高学年という系統が整理されていないため，そこを整備する必要がある。また，中学校へとつなぐ系統的な特別活動のカリキュラムを作成することが課題である。

５　今後の課題解決の方向

(1)特別活動のカリキュラムの充実

①特別活動の全体計画の充実

特別活動の全体計画は，学校の教育目標との関係から，自校の特別活動をどのように推進するのか概観できるようにするとともに，全教職員の共通理解を図るために作成されるものである。特に，自校の特別活動の目標や評価の観点，学級活動(1)(2)の各学年の時間配分，児童会活動，クラブ活動，学校行事の実施時期や担当者などを可能な限り記入して，自校の特別活動の全体像が見えるようにしたい。

現在の自校の特別活動の全体計画は，児童会活動やクラブ活動，あるいは学校行事についての時数や実施時期等については詳しく書かれているものの，学級活動においては，抽象的な記述にとどまっている。また，形式としては詳しく書かれているにも関わらず，それが，自校の教育課題，つまり，子供の実態から遠いところに課題がある。さらに，評価の観点は示されているが，どのような子供の姿を目指しているのか，学校全体で何に取り組んでいくのかという点が分かりづらく，それが，職員全体での共通理解に至らない原因にもなっていると考える。

②学級活動の年間指導計画の充実

学級活動の年間指導計画は，学級活動(1)「学級や学校の生活づくり」，学級活動(2)「日常生活や学習への適応及び健康安全」の指導計画である。学年の特別活動の目標や評価の観点が示されるとともに，各月ごとの議題例や題材が表記される。学級活動(1)は，児童の自発的・自治的な活動であるため，あくまでも予想される議題が表記される。この活動は，学級生活の向上を目指した諸問題が議題となるので，学級集団をどのような集団に育てたいのかを月ごと，学期ごとに記した「目指す学級像」を表記するようにしたい。そうすることによって学級経営の充実も図られると考える。また，学級活動(2)の題材は，教師が指導計画を作成するが，学年内で十分に協議するとともに，学年間の系統を踏まえた指導ができるように題材を設定するようにしたい。

現在の学級活動の年間指導計画は，学級活動（１）と学級活動（２）の内容が混在した表記になっているため，学級活動（２）には実施時期を考慮しながら取り組むが，学級活動（１）については，実施回数も少ない状況にある。また，年間指導計画は，月ごとに学習内容が示されている。そこで，担任は「月」というものに縛られた実践をしている。特に，学級活動（１）については，「学期」をある程度の区分として弾力性や融通性をもたせ，学級経営とつなげな

がら実践を行っていけるようにする必要がある。

③自校の学級会指導資料の作成

特別活動には教科書がない。そのため，学級担任の勝手な解釈で学級会が実施されることが多く，そのことが原因で，特別活動の目標が十分に達成されないこともある。そこで，学級会の活動過程（事前の活動→本時の活動→事後の活動）の各過程においてどのような手順で，どのようなてだてを打てばいいのか，低，中，高学年の発達の段階を踏まえた指導資料を作成したい。そのことによって，全校的に調和のとれた学級会が実施されるようにしたい。

(2)学級活動の指導力の向上

①学級活動の授業研究の実施

学級会の指導原理は「成すことによって学ぶ」である。これは，子供ばかりではなく，教師にも言えることである。そのため，学級会の授業を公開したり参観したりして，学級担任の学級会の実践的指導力を向上させる「学級会のレッスンスタディ」を校内研修に位置付けたい。学級会のレッスンスタディは，学年部や近接学年部で実施し，子供が作る学級会の活動計画に基づいて，話合いの柱の立て方や司会係りの進め方，発表の仕方，折り合いの付け方も含めた話合いの収束の仕方など，場面ごとに焦点化して授業を公開したり参観したりするようにしていきたい。

②校内若年教員研修会の実施

本調査にもあったように，若年教員は特に学級会への指導に不安を持っている。そこで，それらの不安を払拭するための校内研修会（勉強会）を計画的に実施したい。

とかく，「学級会の指導は時間がかかりすぎる。」「準備が面倒だ。」と言われることの多い学級会の指導を誰でもできるように「学級会の軽量化」の方向で指導できる力量を高めるようにしたい。

勉強会は，週ごと月ごとに実施し，校内研修とも関連させて，若年教員が課題意識を持って取り組めるようにしていきたい。

勉強会には，報告者がコーディネーター的な役割を果たし，若年教員の疑問に答えたり指導者を要請したりする。

６　参考・引用文献

若者の友人・親子関係とコミュニケーションに関する調査研究概要報告書　辻大介　2003　『関西大学社会学部紀要』34 巻 3 号，pp.373-389

第 1 回子ども生活実態基本調査報告書　2004 ベネッセ教育総合研究所

小学生白書 Web 版調査結果　2010 年 9 月調査　学研教育総合研究所

小学校学習指導要領解説総則編　平成 20 年 8 月　文部科学省

小学校学習指導要領解説特別活動編　平成 20 年 8 月　文部科学省

２１世紀を展望した我が国の教育の在り方について　第一次答申　平成 8 年 7 月 19 日　中央教育審議会

第 2 期教育基本振興計画　平成 25 年 6 月 14 日　文部科学省

学級・学校文化をつくる特別活動の構想（小学校）　2015　日本特別活動学会紀要 23 号

楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)　平成 27 年　文部科学省/国立教育政策研究所　文渓堂

中等教育資料　No.953　平成 27 年　10 月号　学事出版

特別活動の改善に関する調査報告書―調査報告に基づく提言―　2014 年 1 月　日本特別活動学会研究開発委員会